松雲

特別
チ12
3643
6 (3)

松虫

昔八津乃國河部野乃邊ありし住居
住る者ありく仕ば我氏ありを野の市う
出ちく酒を賣ひ家ちく賣ひ
ちう紀男れ松ゑ賣り酒をの尺酒
ちりは酒家をかりてかえりゆけと
やん不審ちい問べ尋ねて人

故
梅若誠太郎氏
昭和年寄贈
梅若重戸氏
寄贈
東京都立中央図書館

改正 袖ぬれぬれし

いくあきのぞと名残は尽きねども松
まとれ秋をも松むしなく音にや
友を恋ふらん 秋の風更けゆくまゝよ
長月の有明の寒き朝の露に袖ぬれて
行く身の市人に伴ひ出づる道の辺の
草葉の露も深みどり立つまよひや色
色の蓑代衣日も出でゝあべの市路に出る

あり遠里ちかう程近きあやすき
の江さそふ浪けしく浦風も吹くや岸
野の秋なる草ぐく松を郷として松さへ
浪やかくて毎年友を誘ふ市かとれ
かぞくみ我を行くもゆくあべ野なれ
原る面白や 和 傳へ聞く白楽天が
酒功賛を作りし琴詩酒の友なりに

改正 いろはあるべし

[illegible]市屋形に、[illegible]を[illegible]
[illegible]人を[illegible]たりしに
人々酒[illegible]人[illegible]和宿を菊うる市よ
[illegible]も、[illegible]乃ぼるよ[illegible]
遺[illegible]も故人[illegible]ころ成べしいたに人で
面[illegible]醪酒を[illegible]
[illegible]
[illegible]彼人乃[illegible]

改正 酒のこと

酒を[illegible]遊楽極[illegible]乃和[illegible]を[illegible]
人[illegible]心を慰めし[illegible]
[illegible]
中[illegible]
給[illegible]
[illegible]酒[illegible]
乃[illegible]事[illegible]

シテ上カヽル「美景によりて樽の前に
酔をすゝむるハ是春の花とぞ
いへり　時は秋の風おさまりて酒の
名にしおはゞ薬ときく菊の花に
置く露のいとさもあれいたゞや御酒とあひ
上音ハ　君みて従ふ友の交はれ
衣打つに請する月影乃移ふ菊の露の
お移りの盃にもうつる色も猶まさり草
ぬるむ世も秋も限らじや松虫の音も
ひとつ生まれいとも変らぬ友
さては買ふ市乃たゞあれく
ワキ詞「いかに申候今の言葉の中に松虫の
音に友をしのぶとはいはれある事
にて候か　シテ詞「さん候松虫の音に付て物語の候

ワキ「かやうに申せば謂れありげに候御物語候へ

シテ詞「昔此阿倍野の松原を或
人二人つれて通りしに折節松虫の
声おもしろく聞えしかば一人の友かの
彼むしの鳴方へ慕ひ行し程に残りし
友人良久しく待てども帰らざれば心もと
なくおもひ尋ね行て見れば

彼者草露に臥て空しく成ぬれば
共にとこそ思ひしに是はそも何とて
なりゆく事ぞとてなき悲しめどもひそ
あへなき其まゝ土中に埋もれし人の志
ねんごろに思ひして松虫の
声に友を忍ぶなれ其子なれきるぞか
なる程に今もその友を忍ぶのひく

松虫のなくこゑ聞くよりそのかの市人の
ゆかりをたづねて、あるかの所にて霊家に参り
たりしに、やはらかなる日の光さしそへたる
市人乃ものかげ、隠れてあく野乃
ゆくすゑ、帰りきもりくゥ　ぬぎやさ
ては世をすてなんとのもつて
ばほどの女人乃なごり、はかなくあめ

給へ　柳命　秋乃景　松虫をなくゆゑ
秋をも待ちあるゝ　そもこゝろ
むし音の様ぞとは知
のゝ言葉のもれ　出る音もゆゑ
女をばまてどこゝ　ゆかるもうれ
弱め　宮こ　たゞもの　たゞものゝ
みな秋乃野　人まつむし　声

あり　地　我と御手にてたゞ弔ひ給へとおぼし
めしのべたる経も日をぞ海をおもて
思ひ出づるよ松山の雲に伴ひてかへり
きり出ぬ乃多くよつれば日これより　松風
寒林汗原に草の日かりの乃こゝを
わたり浦波をおもてわが後の波あと
とふぞ古郷聞く　笠あるもかつ松吊

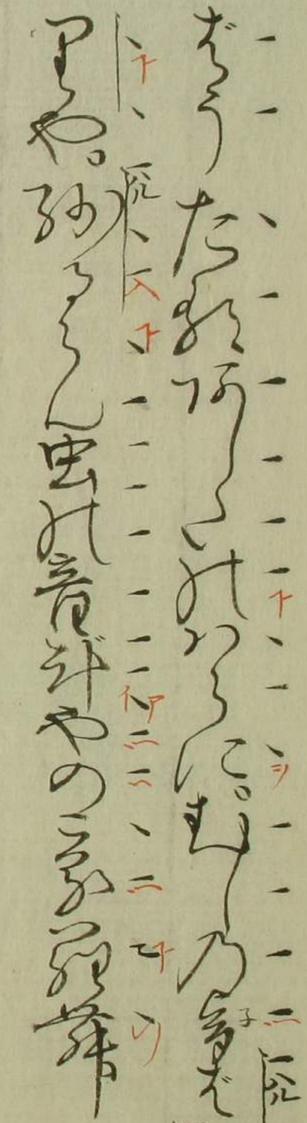
ひや秋霜よりもけれ多まけだ
閻浮乃秋のこゝろ郷原よろ語る
髑髏霊是とまりたまでわれ弔ひ
語るよりともよやかや影もちかみづをとも
おもれ起多露浮き雲とひ月とかけて人
数乃絶えよりゆる人つれ人々千く
なきやかとよりれもちの友ちとちもと

志のぶ出ぬ音をましてあらはれて手向て
売る草ごろも ワキ「浦は難波のさとを
ちらし シテ「あしべの市人訓して ワキ「さすらね
人を シテ「さすらへ人も ワキ「いかに今は我
シテ「かくれども 上音「古郷に住みわび難波
二「人めうく芦火たく屋も市屋形かつもとる
上「忘れざりしを思ふなきわたるを見もしらぬさとも

かくあるべき心や 合地「そをかくて年
を経しあるまじきまことにはるなき別れ離
波にもよしあしも定めてあまた
なかなかや サシ「あまたに落葉を踏であ
ひ住つくいづかにまよ鳥にしきつて
一時より帰る シテ「然れば御旅の楽の遊覧
遊宴風月の友に誘はれて春の山辺や

秋の野に咲きたる花をたづねてまことの道に入るぞ
こころの花なりける
ひゃう一樹の陰の宿り
を他生の縁といふ
なるべし
て去るを心清くめや奥山の深谷に
去るの菊の水くめども汲みもよ
きに流れ出づる末を尋ねぬるこそ
ありがたけれ廬山の
いとうきんをきら

ぬ室の戸にはいかで
清らぬ思ひ出の露のあるの還俗をい
で道をうやまひ
ぬるをこそいさ
かぜ横善の慶家こそ
道をかやぶら濁世の人間をてつ
あき秋をうりのやきを

竹葉の散りしく庭の秋
ひとり寝をぞ思ふ萬木皆紅葉せども
ぞ元元元又イ
ぞ松も乃獨り寝ぬまう醉を
おもて舞うれで格むん
雪を思ふ花乃袖
すすぎ出れ音の
きりとぎすりちゃう

ぱぐりちをて蛍蟬脱色れ音乃
ぱぐりちく秋ぞ松も乃老ぞん
月月月
上月元又
幸もりや鐘を明るしのおそ海
ありの秋ぐらぶ皮人名踊乃そを
元
ぎねく尾花のほのかるる
草ぞうぐたるあ
たのうぐ